

ライフサイエンス事業



上席執行役員
ティム ローリー

当社ライフサイエンス事業は、技術的卓越性と規制対応力を基盤に、差別化されたCDMO、CRO、BPMの機能を通じて付加価値を提供しています。

● 主要な製品の紹介



BPM
バイオプロセス材料



CRO
医薬品の開発受託



CDMO
バイオ医薬品の開発・製造受託

● 強みと事業環境認識

CDMO事業における強み

- 製薬企業が求める医薬品開発・製造プロセス全体を、単一のパートナーであるCDMOが一貫して支援
- 哺乳類・微生物プラットフォームでの確かな実績（細胞株開発/プロセス設計/GMP生産）
- 規制当局承認施設 × グローバル商用生産での豊富な実績
- 深い技術的知見により、複雑なバイオ医薬品開発を高精度かつ安定して再現

本ページの記載内容は2024年通期の実績および情報に基づいており、当時のIVD・IVDM・BPMを含みます。なお、IVD・IVDM事業は2025年10月に株式会社トクヤマへ譲渡致しました。また、BPM事業は2025年10月にMerckへ事業譲渡する契約を締結しました。

CRO事業の強み

- 世界最大級のPDX（患者由来異種移植）モデル群と先進的なオルガノイドプラットフォームを基盤に、がん創薬でのマーケットリーダーとしての地位を確立
- 実験データをインシリコ（コンピュータ）モデルに統合し、予測精度を高めるとともに、開発期間の短縮を実現

BPM事業の強み

- マテリアル製造と品質保証におけるJSRの伝統を活かし、顧客ニーズに最適化した高付加価値ソリューションを提供

事業環境認識

- 世界的な高齢化に伴う医療製品需要の拡大
- 精密医療の進展による治療パラダイムの変革
- データとテクノロジーの活用による、創薬・開発の加速と効率化
- モダリティや技術基盤の枠を超えた急速かつ継続的な技術革新
- 開発はグローバル、製造は各国で行う体制が、スピード・コスト・規制適合の面で重要な戦略として台頭

● 振り返りと中長期の戦略

FY2022の前半は、FRBによる急速な利上げを背景に、バイオ医薬品・バイオテック業界全体が減速し、当初想定していた売上拡大は制約を受けました。当社はこうした厳しい事業環境に対応するため、組織の最適化を進めるとともに、業務効率化および財務基盤の健全性確保に注力してきました。

CDMO事業においては、新商用生産拠点の立ち上げや原材料管理体制の強化など、オペレーション上の課題に直面しましたが、顧客ニーズの高度化および規制要件の厳格化へ対応するため、ワークフロー改善、品質管理の強化、部門横断的な連携推進といった取り組みを体系的に実施。これにより、持続的な事業運営を支える基盤を強化いたしました。

国内における公衆衛生活動では、グループ会社MBLがCOVID-19抗原迅速検査キットを安定供給し、社会的責務を果たしました。一方で、技術・製品開発の分野においても顕著な進展を遂げています。CDMO事業では微生物製造における生産性向上を実現する革新的技術「PUREcoli」を開発。CRO事業では従来のPDXに加えてオルガノイドやEVPTなどin vitroプラットフォームを拡充。BPM事業では高性能Protein Aクロマトグラフィー樹脂「A+」を上市するなど、新たなソリューションを市場に提供いたしました。

総括すると、当社は外部環境の逆風を克服しながら、オペレーション強化とともに重要な技術革新および新製品投入を実現することができました。これらの成果は、ライフサイエンス事業の競争力を高めるとともに、次期中期経営計画における持続的成長の重要なドライバーとなるものと考えています。